

PESが建築設備で取り組んでいるのは、自然の導入・活用です。自然光の導入、自然換気など可能な限り自然を生かした設備を考えています。そして自然の活用で足りない部分だけ機械で補完するという建築設備です。

創立50周年を迎えたのを契機に、改めて原点回帰に努め取り組んでいきたいと考えています。

原点回帰して行動に移す時、いくつかの課題があります。その一つは高齢化の問題です。PESの社員は高齢化しており、仕事先でも「衰えた方々ですね」とでも言わんばかりの反応です。その一方で「豊富な経験がありそうですね」というような反応はありません。

年齢と経験を重ねれば、確かに肉体的には衰えていくでしょう。我が国の少子高齢化は深刻で、いわば高齢化した人たちが住んでいる空間なのです。建築・建設に限らず、病院や工場などで働く人の高齢化も深刻になっています。

しかし私は、高齢化はマイナスばかりではなく、プラス面もあると考えます。年齢を重ねるということは経験を重ねるということであり、経験を重ねれば重ねるほどスキルはアップします。

PESは経験を重ねスキルアップした人材が集まった組織なのです。単に設計するだけでなく、高齢化問題といったテーマにも取り組み、高齢者にとってどのような設備が求められるのかといった点も意識しながら設計し評価を受けてきました。高齢者にとって望ましい設備はどんな設備かを考えながら設計している設備設計事務所は、はたしてどのくらいいるのでしょうか。一方若い世代を理解するには努力が必要です。積極的に行動を先にするのを躊躇しない勇気がいります。可能性を秘めた若さをうらやむことなく期待する心を失わないことです。

企業には若手もいれば高齢者もいるというように、様々な人材がいます。例えば良くないかもしれませんが、福の神もいれば貧乏神もいるでしょう。私は貧乏神が会社をダメにするとは思っていません。むしろ貧乏神がいないと企業は栄えないというのが私の持論です。福の神ばかりだと、しだいに傲慢になっていき会社をダメにしてしまいます。

貧乏神とは相撲の十両筆頭(1枚目)力士のことを指すようです。給金が安い十両なのに給金が高い幕内力士と取り組まされることが多いため、このように呼ばれているとのこと。しかし私は本当の貧乏神は、幕下筆頭(1枚目)の力士だと思います。基本的に無給金なのに給金がある十両力士と対戦させられることが多い。おまけに十両の最下位力士とわずか1枚違うだけで、付き人(ふんどしかつぎ)として関取を支えなければなりません。

つまり貧乏神は「支える(支援する)」存在であり、決して嫌な神ではないのです。企業にとって貧乏神は必ずしもマイナスの存在ではなく、経営者の発想しだいでプラスの存在にもなるのです。貧乏神がいると、一番下を中心にしてものを考えるようになり、そこから出発するようになります。それが自然なはずであり、このような考えのもとに私はPESを経営してきました。

## 上善は水の如し！

私は毎年の年頭にあたりテーマを設定しています。50周年にあたる前年は、老子の教えである「上善如水(上善は水の如し)」に決めました。これは初夢から生まれたテーマです。

上善は水の如しとは、「最高の善は水のようなものであり、水のように生きることが最高の人生のあり方」という教えを意味する故事です。万物に利益を与え、争わずに普通は嫌な方向である低い位置